

911.3

八

陸 氏

陸氏
上仁
井庭



あまのついでにふたつとて
はるかにあつたふたつとて
あまのついでにふたつとて
はるかにあつたふたつとて
あまのついでにふたつとて
はるかにあつたふたつとて
あまのついでにふたつとて
はるかにあつたふたつとて

あまのついでにふたつとて
はるかにあつたふたつとて
あまのついでにふたつとて
はるかにあつたふたつとて
あまのついでにふたつとて
はるかにあつたふたつとて
あまのついでにふたつとて
はるかにあつたふたつとて

あまのついでにふたつとて
はるかにあつたふたつとて
あまのついでにふたつとて
はるかにあつたふたつとて
あまのついでにふたつとて
はるかにあつたふたつとて
あまのついでにふたつとて
はるかにあつたふたつとて

入るは日一 疎い
 三 川くまきふ家運付く
 うや懐く 梓 きくめ
 思ひをたふめふふ切所
 いふふふふふ 五位乃汁五
 松乃木ふふふふふふふ
 ふふふふふふふふふふ
 余佛ふふふふふふふ
 穂夢ふふふふふふふ
 ふふふふふふふふふ
 傘乃肉ふふふふふふ

荷今
 李凡
 西相
 荷今
 重五
 昌圭
 李凡
 重五
 荷今
 李凡

船装おふ 出ふ
 ふふふふふふふふふ
 船願ひふふふふふ
 甘ふふふふふふふ
 紀念ふふふふふ
 ふふふふふふふ
 ふふふふふふふ
 ふふふふふふふ

西相
 荷今
 昌圭
 西相
 重五
 昌圭
 李凡

三月六日 神水事
 奈良坂や畑ふふふふ
 ふふふふふふふふ
 ふふふふふふふ
 ふふふふふふふ

且葉
 野水
 荷今

こゝ槐まつるまじりていり月
 陽を乃りゝのあふちま時々
 まる面秋ゝ一丘奇みゝゝゝ
 田とおくむる家里よせなり
 刀乃筋をにぶゝ中乃ま
 陣や三升の赤るれ流ゝりよ
 るゝひく乃ゝやゝあひゝゝ
 兄つゝゝゝゝ九日乃月ゝゝ
 君乃にゝゝゝあゝゝゝ
 三月十六日且葉の田家よゝゝ
 蛙乃ゝゝゝ申ゝゝゝ採るゝ
 野水

類よあゝゝゝの雨ゝゝゝ
 蕨意家岩末乃奥ゝゝゝ
 ちゝゝゝ人ゝゝゝ馬乃ゝ
 立て乃ゝ海の舟乃月影ゝ
 芦花穂を揺る傘の流
 残さゝゝ施豚鬼の僧の集ゝ
 岩のあひゝゝゝゝ里
 雨乃日も瓶焼やん煙ゝゝ
 いゝゝゝゝゝゝ乃一はゝ
 解ゝゝゝゝゝゝゝゝ
 今をより更ゝゝゝゝ
 且葉
 載人
 荷々
 好筆
 此ゝ
 且葉
 荷々
 載人
 野水
 冬文

畢くくしてくくくくくくくくくく

荷子

追加

三月十九日舟泉亭

越人

山吹乃あふけき胆めくをれり

蝶ふりけくふけりあき岩く

きりくふや族晒くき雪ありて

行幸乃くあふけりあき雪

朝日まきりり銀箔のふく

月かきくあき乃門くあき

春

昌隆乃松とふくあき時代めき

元日のまきりるの駿馬屋中り

舟泉

聴雪

金鼓

荷子

舞華

利重

重立

幼き乃遠里牛けりあき日す

りきのみ海をけりあきあき

門く松菊茶園の雪さき

鯉の音水不乃園く梅白

舟く乃く松ふ雪けりあき

曙乃人あき牡丹雪ききき

便てくあき日里乃睡りく

星くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

朝日二分柳の動く白ひく

えりくくくくくくくくく

芥摘くくくくくくくく

昌主

兩相

舟泉

羽笠

且葉

杜木

屏夕

吞鹿

睡雪

荷子

月

且葉

のふとる人の海へ

みくまを白雲いやー夕暮と
古池や蛙飛ちむさうのねと
傘張の睡り胡蝶のやうに
山も花牆根くの海を
花よりつりれて花より花より

春野吟

只今も梅を曲家菴二
禁寺からぬれぬれとさう
板より梅乃還さふあれ

餞別

春の光さくさくあて別れ

越人

芭蕉

重五

龜栢

越人

杜因

李凡

荷子

越人

重五

同

九白

重凡

越人

杜因

龜栢

無泉

高路

山畑乃東つとさうと夕日
板より梅乃還さふあれ

夏

知くも花を乃山を尾八
郭はさゆの煙をぬる花
かつこも板を乃脊を二里
さうさうさうさうさう
さうさうさうさうさう
傘をさうさうさうさう

さうさうさうさうさう
さうさうさうさうさう
さうさうさうさうさう
さうさうさうさうさう

萬曆二十九年己未九月

融雪

老聃曰知足之足常足

夕ふ不レ雜炊あつて菓屋に

裁人

第其乃微西之屋其下為校武

柳

けいさなハナグミルナハ夢をみる

鹿王文

萱草ハ花ハ黒キ花乃色

荷兮

蓮池のふきりくはふきり

全

曉乃爰臨之采石遲暮兮邪

昌圭

夏川乃青又若うなるを臨哉

五里

譬喻品之三 夢無妄猶如火宅

2500 5000

六月の行ぬが飛了基、これ

我人

秋

齊戸田方より山菱をみそで煮く

且蒙

夏家の玉糸

玉象柱

齊人

丁未之春一寐入冬而終

兩相

聖王く人をやとひて月を

苧苧

山寺より来りて不足乃月夜

赴人

瓦少家也面皂秋の月

神

ハ、福をかき、屏風の鑑を以て

具足名之聲乃多一月又舟

全

侍坐

こめ屋をる兼高しん物あさん

荷兮

閑居地感

秋ひかり琴柱をくまなく撫で顔に
朝鳥とともえ一戸の光をうつり

荷兮
舟泉

冬

るをぬき生ハタ目れ村志くれ

杜国

芭蕉翁を宿しゆりて

六律

雲をよみ旅亭を敷居をまをす

加行

言け系藤の子乃落くれ

昌碧

言をさくちう印家雪のわいふ

芭蕉

り焼の煤けをさきさるれくれ

越人

芭蕉翁をわたりてうふ附

このはれわいふ名残くれ

杜国

涙まよひたる室をのりて

あふりきる雲霞のしるを籠

荷兮

地味な文章が、
読者の心を
捉へてゐる。

昔は、
人々は、
この世を、
夢と見てゐた。
それは、
今でも、
変わらない。
夢は、
人間の、
心の、
奥に、
ある。

麻呂の月神の朝鼓とあるらん

重五

桃をたぎらるる貞徳の富

正平

面を折る沙羅の田螺あつて

杜西

奥のきつとふとあつたあつ

杜水

床をたぎらるる徳也といふる男

荷子

縁をぬきけ恨みのくろく

重五

口おしと痛をくらる地をふ

杜水

明日をうらなふくば送りしん

重五

小三をふふとくひひふくく飛

芭蕉

月をそとまふ水牡丹ぬえ人

杜西

縄あつたつとふれ登るる

重五

うらなふくば送りしん

重五

神の月の神の朝鼓とあるらん

杜西

桃をたぎらるる貞徳の富

重五

面を折る沙羅の田螺あつて

芭蕉

奥のきつとふとあつたあつ

杜水

床をたぎらるる徳也といふる男

荷子

縁をぬきけ恨みのくろく

重五

口おしと痛をくらる地をふ

杜西

明日をうらなふくば送りしん

重五

小三をふふとくひひふくく飛

芭蕉

月をそとまふ水牡丹ぬえ人

杜西

縄あつたつとふれ登るる

重五

うらなふくば送りしん

重五

月よそとて唐漏の聲は木杵く
急きぬるめと臨隣とすの
秋燥の虚は多きとつめさ
晨の實つてふや下つちり
袂より初とひくとふさきに
都くつと典侍の房の内はこ
三ヶ代に鸚鵡鵲尾をうけいふと
しら雪ういさむ張の福活刺

荷兮
とふ
芭蕉
重五
杜國
芭蕉
重五
荷兮

つえはのく事僅は十歩

杜國

はく是のて月より花を荒れ

重五

菖蒲の葉を神祇人か夫より
かの門とわかれあまれも
馬糞極ありつる凡のあま
葉は陽者巧む世の痛は英
花をうけふ花む娘うつと
燈籠やうけふ花をうつと
つゆ森のすいふ力を撰れと
若葉さす青く一葉實はの坊
秋月夜双とつちの旅ねて
ふま買みちにはくふとく
志のふゆのわささ離とゆり居る
之の路のふより来る人とこす

野水
芭蕉
荷兮
重五
芭蕉
重五
荷兮
芭蕉
重五
荷兮
芭蕉
重五
荷兮

まうにうへは波のうへにうへに
 佛喰さるる魚解ホトきさるる
 縣あるにこれにうへと作うれと
 又ゲ形量ある 畠 六 反
 うきうきなるなるなるなるなる
 真直のる乃移るるなるなる
 抑うさるる天剣の橋のなるなる
 なるを院なりとてを送るぬ
 けし子に成斯長なるなる人
 毎日とてむく 刀賣るる年
 雪の相異に國の坐坐なりと
 なるなるなるなるなるなる

あゝ人とも様を惜み香も
芥子のゆゑは名とを名に
三月月の夜を暗く静にお
煉油の光をみずく、くちと者
喜ぶるをゆゑに心を放る
聲もなき念佛、数とるを
うけうすに巧い、心は
おひひく、心も静る、常
あうれ、花たう、お花の
うの、すき、日と、お花、

中ノ波傳ふあり火燒家々ありけり

猶の歌より買ある女とてうき
 泊瓶の葉をさあつ小日のくれ
 なかりまゝく移しかゝる月又
 はぐ美を向る美きなりふま
 寅乃日の旦と報知れど起く
 ぞまかりつゝふ南ふふの地
 いづこゝて移るまゝぬ人の像
 泥まきらのまゝに芹の根
 粥まき居あかつぶ花よりあま
 将夜のトより移るまゝ風
 われうとわくく簾押されて
 あゝまゝな夢と責るまゝも

重五 荷子 杜園 井水 芭蕉 羽生 荷子 言八 言八 芭蕉 ねま 杜子

田家眺と

栗月や鶴のイッあゝいぬ
 ぞれ新日乃あゝれなりなり
 桜櫓山家の作とせれ美話
 ひきこゝるまゝこれ地とわかれ
 音も水も具まゝ月のまゝと
 酌する童葉切なりいて
 秋のころ旅は連飲いとうら
 ぬゝれて富士とあゝ寺
 茶とて移れ花のまゝ音
 茶とて移れ花のまゝ音

荷子

芭蕉 重五 杜園 井水 芭蕉 荷子 杜園 芭蕉 重五

水干と秀白の聖いやう子
山菜花の白く並れたかり

冊の
うら

追か

羽生

いふあつては難面うしとふ教
様おあつてうれうれの松
そくは前下より又後をちやきて
樽笠は又浅屋川に於て
銀り掬かりし月半海
ひらりな様をまゝに波阜山

萩分
赤玉
杜玉
芭蕉
桼水

知山とていふ人
月半海とていふ人
そくは前下より又後をちやきて
樽笠は又浅屋川に於て
銀り掬かりし月半海
ひらりな様をまゝに波阜山
いふあつては難面うしとふ教
様おあつてうれうれの松
そくは前下より又後をちやきて
樽笠は又浅屋川に於て
銀り掬かりし月半海
ひらりな様をまゝに波阜山

いふをうと嘆てあえふしり
やうき節もて意は乃て
物なりふやふとの言つて
月又これ顔乃れねとさ
秋風の舟とてこゝる波の
唇ゆくこゝや 白子より松
千部後花乃れぬらぬ 田
巡れ死ぬる 万のうきう
何よりを標の現とあはれ
又此の力のさく 万の
羅子自をいへる 万の
然るをみえとほのめいり

碩水翁 碩水翁 碩水翁 碩水翁 碩水翁

手来り紀れ冥中より 碩
酒下りけり 万のうきう
双六乃月をのそく 万の
假れ持佛はむくふ念仏
中り 万のうきう 万の
家々々々里のわき 万の
怪れていぬ 万のうきう
月 万のうきう 万の
花 万のうきう 万の
唯 四方なり 万のうきう
一貫れ 万のうきう 万の
為者乃を 万のうきう 万の

碩水翁 碩水翁 碩水翁 碩水翁 碩水翁

花咲くも芳野ありと欠廻
此

翁十二 珠碩十二 曲水十二

珠碩

翁

路通

全

碩

全

通

全

碩

全

通

全

碩

全

通

全

碩

全

越人

いろく乃名をむりやまのま
うれて懐のまをこころぬ
蝙蝠ののやうふつとて
やる龜乃とてぬ休哉う
紫蘇の実とてまに今をま
款子あひて月よ抱く
秋の色宮も乃ををせぬかり
とてとてとてとてとてとて

全

通

全

碩

全

通

全

碩

全

通

全

越人

うつりる乃ぬ城と名をひきま
かたうとて市の名をひき
籠乃乃らひきとて川の端
念佛やておのむとて
こゝらえとてまをひき
居此の里乃大まけとて
旅路雅き人の堀はれて
花をうみよ月ハ獅 取
あかのをとて椽の下とて見れり
生鯛わとて浦をまき
け村の度きとて醫者ありり
おととてとてとてとてとて

全

通

全

碩

全

通

全

碩

全

越人

かそくさるを退屈もせぬは
すゝと泣きわたり酒のち免さハ
なまの免やう敵乃々ときひつぎ
著書まゝといふ——山の洞中
うやむらり里乃といれ月影の歌
とりいそつ子のこゝろ裸に
免つてやうも喜べしとしよ
文珠の智恵も樂時の愚痴
われが城又といふあまひの味
何ともいふぬえの海に泊相
志のよ歌のれこううきて笑ふ
おもしろいといふぬえにて

人兮 人兮 人兮 人兮 人兮 人兮 人兮 人兮 人兮 人兮

汗の巻をかくて夜をやりし
 志をくくれば雨とくくればふる
 花さくつり又百人を贈る
 月八夜ともねをくくれば
 珠碩九 公翁一 略通八
 荷言十 載人八

城下

鉄炮乃^ノ字音小鼻^{ハナ}。卯月外
砂の小まゑ乃^ノ獲てくくく
面肌より一寸下の小鼻捨つて
かきとある一川
（モウラ）
湖ひろくく
井原
里東
泥土
乙州

暮いさくひ二人走りてりる處は
秋の夜 審け物さうきある
女房花心細きものねとされて
目の中へねとくえきつらある
やふも又川原へさうきある
ね乃ねうさきつさや
馬よりねきふをさうきある
一里こねさうき山の下
又さうきある岩屋さうきある
ねれねハ洞あさうきある
雪舟さうきある花女さうきある
さうきあるさうき丁百の蔵

怒誰

珠碩

筆

野程

里東

泥土

乙州

怒誰

泥土

里東

母任

乙州

珠碩

怒誰

里東

珠碩

乙州

母任

怒誰

泥土

珠碩

里東

母任

乙州

月夜ふさ屋をさうきある
養ふさ乃 養ふさ乃 さうきある
さうきあるさうきあるさうきある
さうきあるさうきあるさうきある
乃みねに 乃みねに 乃みねに
さうきあるさうきあるさうきある
時くさうきあるさうきある
配ふさ乃 配ふさ乃 配ふさ乃
さうきあるさうきあるさうきある
連も力を 連も力を 連も力を
かゝるさ乃 かゝるさ乃 かゝるさ乃
奥乃こゝろに 奥乃こゝろに 奥乃こゝろに

綱剛さくおとあらしき山彦て
 夕也の月小葉食嚼わこ
 看泥乃嗽又ゆきく嘆気勢
 四十重老まうつろき源
 聚くせふ松乃泣を捧取て
 碑を細きふあけ吹る
 杉村の花ハつるまはるき
 田玄片隅は苗のりは
 野徑 六 里東 六 泥七 六
 乙列 六 怒誰 六 珠碩 五
 筆 一

雜

し加

亀の甲亨るる時を鳴る
 唯牛糞小風乃つくま
 百姓乃あつた仕まをのき
 小きせりゆるりくはの細
 獨居く奥の面ひり花の月
 端端さるるゆるり花
 秋の夜の赤きよりうたつる
 風呂にか城乃走つる
 雲乃あつたあつたあつた
 名やうあつたあつたあつた
 初之小雛のまはるる

杯碩 里東 探志 昌房 及眉 世使 二啗 乙加 珠碩

んのかそこふを思ふあはれなる
山笠原乃多ふ吹そと風一箇の夜
寐こゝに起てそふハ多時
残入の中をふりて月小り
すこ上京をふりてやこむ
蓋ふふるるる羽の町屋なる年々
雀をふりて一箇乃りて久き
ふと思ふる月をふりて思ふる
鈴のひたふる思ふるの思ふる
流るるるる思ふるの思ふる
探ふふふふふふふふふふふ
暗るるる思ふるの思ふる

里東
探志
昌房
正秀
及肩
世傳
一啖
乙刈
珍碩
里東
探志
昌房

傳るるを思ふる思ふる
いふふふふふ一箇に挾策
ふふふふふ。鯉棚乃秋
はハくく切鉄の鐵重風吹て
ふ加乃ふふふふふの思ふ
喰ふ味のつくつて思ふ
燐掃ふふハ次は居る
目をめく思ふるの思ふる
ふふふふふ。かゝる思ふる上侍
ふふふふふ。思ふる思ふる思ふ
縄を思ふる。寺を思ふ。炭
花乃思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

及肩
野徑
二啖
乙刈
孫双
里東
梅志
昌房
正秀
及肩
世傳

さくら小形入獅子のまゝ凡

里東 四

乙刈 四

孫碩 全

探志 全

昌房 全

正秀 全
二嘯 全

及看 全

野徑 全

田野

正秀

嘯道や苗代時乃角大師

孫碩

明きん ちまむ世風の聲

全

甯ふとのわや々に鳴くまのそ

秀

かちちち けりき門口の文字

全

月影不利休乃あを豊な数

碩

なぐ せきとせきとせきとせきと

虫を皆つ 能く せきとせきと

秀

序はく の本履くつめ

碩

哲文と百もあそびあそびあそび

秀

かきこく けりけり 侍

碩

頃十八す 拙ふ自由なる書

秀

狐のあそび 弓 けりけり 侍

碩

月影の解走れ せきの張河

秀

きりけり けりけり 侍

碩

けりけり けりけり 侍

秀

稲あそび 子も けりけり 侍

碩

けりけり けりけり 侍

秀

あひ乃 山 弾 けりけり 侍

全

雲雀啼里と既盡き哉し
 空を吹くて飛る彈の如く
 木堂ハすの荒れをのりし
 石の縁に秋の光を照らし
 齒を痛人乃て其の如く書
 唇をくちくちすくし瘦より
 後坂乃て空の如く如く
 口上果ぬりふくすめ財
 多ふやうくふ小判の如く
 秋入初。肥後乃隈本
 幾日後も皆て月乃。飯
 寸布子いとし。秋の如く

秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩

沢山より元めく。空吃られて
 呼あつてくやも猫を招く寸
 子親近小人町乃雨あつり
 や。月乃机本の芽萌え
 若葉ふも。秋の如く
 水母く。る。場ふも。ゆ。の。さ。う。ふ

秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩

正秀 十九 珎碩 十七

高麗人...
平一...
石...
...

猿蓑

晉書其角序

御膳の集つゝあやうき言ふはりてけ道にありて記る
 き世をれや幻術の才てしてその白く魂の今もいひ
 まゆめうらな御さるる一えし世よりすなりそく今
 うつてし事愛のあまをとりしむあ徳さあま及んを
 こにまゐりしとあり破面の上人の骨を人々作り
 しとぞ輝ける我さる笛を吹くふかしく作りしされ
 り人よハ成て侍れどもあのかみのよりれさる友魂乃
 佐のよりするふ侍るをされハたよりおれ入るるハタイ
 カエラうくひきこくつり人吹響も少ぬへー只
 能哉女魂の入るる舞はるるといふとあま相新郷のころ

漢張芝草書聖賢像

史部

通白

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

280-285

元 明

1164

同

四

去來

百歲

水野

[illegible]

其用

五

紅

卷

陸

九北

揮毫のたねは、
 張牙は、
 ちやの、
 り、
 右、

五

君子

藏人

家譜

記

金砂の砂田小実を煮てすく

難炊のやうに煮てふきこもり
こ乃を煮て牡丹のやうのまの裸

車来
角

草津

海見しるやうに煮てふきのこ、うの
汁に色水に煮てふきのこ、うの

尚白
珠碩

五月朔旦

猪すりの外は煮てふきのこ、うの
汁に色水に煮てふきのこ、うの

尚白
不玉
且甘菜

今ハ世を多のむく、きききの増
えん改のこ、うの汁に色水に煮てふきのこ、うの

去来
探丸

煮てふきのこ、うの汁に色水に煮てふきのこ、うの

みちるゝ多質を煮てふきのこ、うの

尚白
鼠粉

炭電子多負れ枝の倒れり

凡北
甚魚

怪つゝぬ旅のさうや、きききの増

其角
凡北

門前的小家もあうぬ、きききの増

凡北
林境

本鬼や杉のひ切、きききの増

凡北
半殘

あゝ破やうに煮てふきのこ、うの

大艸
曾良
去来

狼のわし臨海よりや後子も
脊門にのり入るのなる千々
い川とらにふまふれてつち
矢田の野や浦のふれはつち
後士れふらふ跡や船の中
水底をふらふとある良の小鴨
る方にも後入るおる余音の満
死まうと操ぬらんやあうか
襟巻は首引くく冬れ月
ころあやや鎖のされて冬の方
の、あうれ蒲団をうやあの旅
んやうとる旅人さうとる山

史邦
夫中
千那
元北
木節
大を
路通
具東
於凡
其角
喜月
喜月

首山
首山
題竹戸之哀

竹戸

るめめとるうふれあうと紙衣
真のうと 鶴乃やせあき水衣
まのうととね珠も増り守細衣
赤白あは候と
膝つきふりこふり布る霞衣
桜桐のまじあふれあうと
鶯乃の橋よりくけと 霞散うと
呼うととねあふらふあうと
さうれあうとやねあふらふあうと

史邦
野童
示峰
元北
素好

卷之四

弱法師家門ゆりて鉄のれ
 事の新やき僧文をすまふと
 うすきものてきとけりやう
 うきてりて年のまうけり
 大とやれやうれう人う
 やりうれてやうけり
 うと人うけり
 うのれ破き袴は實う

長和
來
月
羽
平角
洛通
杉凡

夏

有明の面影をうやほすも
 交うとも果ては別れや時を

生角
木部

時を移るにむけは新しき
 時なりあまかきうては清き
 布ききぬけききききき
 けきききききききき
 留魂やきききききき
 入おれきききききき
 けきききききききき
 けきききききききき
 こひききききききき
 松橋一見のきききき
 毛ききききききき

芭蕉 尚白 允兆 智月 史邦 羽江 太子 去来 奥州

松島下藩より其のれに於て

晉

うきとあをさしうきとあをさし

世若

疎旅をせぬく屋をさるる

保

より楓葉のうきとあをさし

曲水

四月八日 結意 夢墓

あふふふふふふふふふふ

金卒

あふふふふふふふふふふ

別僧

あふふふふふふふふふふ

越人

あふふふふふふふふふふ

社人

あふふふふふふふふふふ

社因

あふふふふふふふふふふ

鼠輩

あふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふ

半残

あふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふ

仙化

あふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふ

九兆

あふふふふふふふふふふ

九兆

南都旅店

あふふふふふふふふふふ

千那

あふふふふふふふふふふ

千那

豊國あふ

あふふふふふふふふふふ

九兆

あふふふふふふふふふふ

五来

かけのちや 穂を時乃穂のすきふ
 穂を吹くさうし ころし 一のれ

芭蕉 正秀

明石夜泊

諸君やういふ言をなれぬ
まゝの代や筑の庵も獨一ツ

芭蕉 越人

五月二日

屋の音く並くハも音通分

其用

稔於心也

芭蕉

陽
公條乃唐公之
餅

若

さういふ客人やうな

尚白

五月六日大坂より池の寺迄を并ひて

得度

大坂や又ふ、夏乃又十

蟬吟

奥品多餘少く

夏華也岳之少免乃歸

芭蕉

這よりカハ屋の下に蟻の窟

月

山崎 幸三

月

五ノ西ニ家少ク控テあり

九北

乙卯歲北味子之氣五月面

木部

る士の續ひありとつと雨

史邦

奥江急坂の郡又々々お安政の堀ハ

ろくろとろくろと道より二里半

をとりたり乃ち筆を以て書きたるなりと

あゆまうきるみぬき

凡流のくさや奥の田種と
芭蕉

如相乃云云上云云

眉

掃を面糸あして石松の末

今

法隆寺実情有る松の末子を拜に

汚

袴れいしきわつう一子松の末

小那

田の畝に豆つゝひり 菅、うれ

成守

菅不曲水を構あて

菅や吹風はれどて 菅の末

去来

菅田乃菅又二句

菅の末やふき位野を菅の末

凡北

けり又や杉久砂々おろつゝ

芭蕉

之然世々隔てりう付

菅ささきうろくき八鬼尾谷

長崎
田上尾

あかろりふ野とせりあゝあゝあ

草ひしや百合をわくゝれり又

尚白

赤後

市つりやわしりあつゝ百合の末

さく凡やあつゝり又百合の末

何処

梵飯钵をわけて

乙加

子やたうしきるの末も飯の末

嵐紫

銭別

まきやや飯屋をまつ飯の末

搭子
里東

うゝく城人といれや

まき屋すゝは若くはれむし

みり屋を吉次う冠と名結

其角

隙也や空の如くあり身の元

大州

下室や地虫なりこれ蟬の聲

嵐雲

窓のつやに花を映しゆる蟬の聲

探志

形くみぬくもはるを霞の影

市

多きや育ち林川るあつては

北

流るる水く流るる花のそく流る

舟川のまはれ唱へ奇く合歡の歌

千那

白雨や鐘すゝも目れ夕

史邦

素堂と蓮池を

白鳥や蓮一松の枝わらま

嵐東

日焼田や雨くつゝくすく桂

乙加

日乃星と鹽の庭に蟻くは

北

日の星やこりて星や牛け音

同

そと星一葉まよひか葉の影

木節

夕の月さよられてつゞき星の影

世香

青草を陽入るるあつたさ

紅

千子やまのつゝくすゝくすゝくすゝく

巴山

よりまきまきまきまきまきまきまき

母さ人の少少を今や世の中

芭蕉

水虫肉や影くゝまぬくまぬく

宗次

まきまきまきまきまきまきまき

宗次

まきまきまきまきまきまきまき

北

海王のふくみ海都さうりふくみ 今

加賀の小春くさき多田の社社の
あかきくさき多田の社社の

うすく月く月め切ありきききき

なうくまのあきく月め切ありきききき

むじんやれ甲のめれきききき 芭蕉

きききききききききききき 尚白

くききききききききききき 凡夷

いせくさききききききき

きききききききききききき 千子

きききききききききききき 之道

きききききききききききき 半残

月々きききききききききき 未未

きききききききききききき 土芳

きききききききききききき 雙

きききききききききききき 中

月新やきききききききききき 未未

きききききききききききき 雙

きききききききききききき 草堂

きききききききききききき 乙如

きききききききききききき 大砂

きききききききききききき 元兆

きききききききききききき 尚白

向の終りとも月を望み

曾良

元禄二年つる此後月を望み
元禄の四外は皆好むとの言なり

元禄

月清く雲のりくも空の上

仲秋の月を望むを送る詩

長身
昌子

月を望む人の子を望む

加江

修正の月を望む人の子を望む

高白

一戸や月を望む人の子を望む

主采

月を望む人の子を望む

主人

月を望む人の子を望む

正秀

一戸や月を望む人の子を望む

嵐兼

月を望む人の子を望む

九兆

月を望む人の子を望む

千里

月を望む人の子を望む

珍碩

月を望む人の子を望む

九兆

月を望む人の子を望む

半残

月を望む人の子を望む

尚白

月を望む人の子を望む

其角

月を望む人の子を望む

珍碩

月を望む人の子を望む

其角

こけは乃 柳の秋
猶うろく 母は此邊へうゑむ

土芳
凡北

自題落柳舎

柳やーや 柳をちきあふし
まゝ流やゆゝく 柳の下を流る

去来
壺生
凡北

神田桑

されうろひ 柳の柳をわきま

神田桑の鼓う川音 蚊足

柳をくわひ ありとや

嵐

文州

花すゝを 大名をとうり
り 秋の口を日 弱るすきけ

立ちし 秋の夕や 風がら

凡北

世の海と 龍の尾のひき

全

修奥の 番ふをとうり 花の葉

梅子

春

梅 雪く人の 夢乃 悔もあ

露沾

上 福の山 莊はましく 花便し

梅 香や 山 嶺 獵入ル 女れす

去来

むめく 夢や 分入 里を 牛の角

句空

庭真

梅 香や 砂利 へ 流る 花の葉

土芳

く 柳や 胃 け へ 柳の葉

半残

梅 香や 酒 の うろ へ 柳の葉

蟬

妙なるあやけ一仏脚をを移のたう

其公角

子良破の月あ梅をうていそ

清子良多は一そと都一梅の家

芭蕉

瘦せ敷やゆうたふの朝の梅

十那

所移く白梅くわむ梅縁か

凡兆
搭
文

日當る乃梅咲ころや眉年房

暗香浮動月黄昏

入相の梅中より色ひきこころい

風菱

武けはありゆく旅亭の残夢

心那

寝ころりさふれ細目や園に梅

辛未のくくはせのくくあさくく

ふは日されて梅のふけあさくく

四角花よりあさくくあさくく

業肉あさくくあさくくあさくく

すは梅のひきききききききき

身黒くくくくくくくくくくく

そのあのかきききききききき

くくくくくくくくくくくく

忘るこで

夢さりて又一白のくく梅

嵐葉

百八のうてまふのや雪乃ゆあ

生葉

ゆくくくくくくくくくくく

五未

野鳥や馬道のけく摘みあさ

史郎

くく市や雪子漕舟あさくく

嵐葉

有れ月あふあめやのささゆへ

如行

憶公羽之客中

裾おろきあををつゝき人草枕

嵐雪

つゝすて踏月めくささあきあき

踏通

七種や端まうりうり乾くらす

其角

ふあふりゝ霧のわけ根芥

犬吠

うすしやわ川ふきさきうき

全角

瀬とハ夢のころさた月おき

全

沖ささこぬきあれハ瀬より

去来

常におき溜るす便後ハ

桐

ききやいやハあふれさうりや

漢石

うらもさやまきあきハ

其角

常やハ夢のささつゝ小園の

凡兆

常やハ夢のささつゝ小園の

凡兆

けろろささハ折るハ

探九

けろろささハ折るハ

探九

けろろささハ折るハ

探九

けろろささハ折るハ

探九

けろろささハ折るハ

探九

侍中乃ハ月もささハ

木白

侍中乃ハ月もささハ

木白

まうりハささハ

木白

うらもさやまきあきハ

木白

越人

うと友小やうれて榴の元ふら

西海公少く能き之當在

春月ふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

妙く喜ばれしうし月多の二月初

出づりや 榎みおちぬきそふり

豊登平幼とてふふ

此の事の如く

白魚也 海苔をト解く人食を

人の心をくみかへて

善くもたふし

陽明

Handwritten text, likely a signature or name, written vertically in cursive script.

子下ヤロウノ落々露の砂

今よりいふとあるの處に三

野るより皮あろくは瓶

うけつふや繁明の系は萬葉

いふゆゑ、自らの心を修め、生活

稽察の事案をとりわけ

從孝之字一也二也外

常孔子王聖賢傳

道々専々燕州へ入道

五、六、今や紅の戸のその層

三ノ

去來

集賢堂

尚白

東坡

崑
雪

九北

其南

松年

元志

荷

白梅

力士芳

冰同

九北

世道

力

卷一

之 31

三

生力

元知

10

五七五
 不惟くやわき紀されしもの
 妻ありや田舎のまね歌
 くらゐたれあゝや歌ふも
 泥亀や草代あゝの畦つゝ
 蟬さうさふ殊の竹中虫の
 振るゑやもた度ふやうな
 云風ふこくこれ鮎のやうな
 桃痴くりりあゝやうな
 くらゐな歌あゝやうな
 里人の無常さうな
 障のまゝさうな

日の子やこころのよの親すゝめ
 着の鞆ぬむ春のすゝめ松の毛
 園に木や葉をまといててや樹
 哉うへに雲霞へけりて箱のまゝう
 のあやうきとてうへに道なきと
 のあやうきとてうへに

勢は泉の樟の杉枝ふ日ハ入ぬ
 うすきよりくさるる雲のうらみ
 子や侍へ篠うき花のさあたる
 ひもくあくる中ね拍子や新あま

いんあう幾と

一里をいれり花のなる孫とや

日

古来の墓 武蔵谷中からいふ墓

をいふと元年のほうの地よりいふ

墓のふく 根 柱 並 け け け け け

おれおれいふていふていふていふていふて

徳り子他の墓 柱 並 け け け け け

まういふていふていふていふていふて

関

知人ふあういふていふていふていふて

も末

ある僧の塔のいふていふていふていふて

九北

浪人のやういふて

花のなるなるなるなるなるなるなるなる

手残

大いふていふていふていふていふて

長眉

いふていふていふていふていふて

大いふていふていふていふていふて

若良

道灌山のいふて

る清やるるるるるるるるるるるるるる

出葉

源氏のいふていふていふていふて

様手ふふふふふふふふふふふふふふ

月紅

庚午の歳家を焼て

焼よりいふていふていふていふていふて

加

北枝

いふていふていふていふていふて

九北

海棠乃いふていふていふていふていふて

普松

大いふていふていふていふていふて

草間くやう。ひや菰のふ
山や。蹴踏しけり尾のひねり
やうつーはるえいそや夕り
光る角しく。外花つむむほ
夢のあまき、とめてようし

木石の味

其妻の存亡を以て其妻の
春に彼をうけた初原の堂に

五游水榜

ひきかへをふねの人とけしき

此烟を刷ぬるに
之れ

彙

殺川の戦うゝあつて川をえて
 たぬきとてゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 せいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 かしゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 りゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 何ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 里ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 けゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 芝ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 鳴ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

茲邦兆茲來兆邦來茲邦兆

三里ありたりは通うとえける
 この表も盧曰く男居ありて
 一木つぎたる月の機取
 苦ありて不子並ふある水跡
 ひろり車してとねの腹より
 いちとぎに二日乃抑も喰て重
 ちかけさすむき暗けお風
 大よりいそぎれ電る装束
 けききん皆居仕舞より
 瘦更月のまゝ起車る力わさ
 隙をうりて車引む
 うき人と根超ぬるくらん

来邦兆来邦兆来邦兆来邦兆

いまや別の力さし出と
 せしけふ橋てくしを
 おもひ切しる花よりひるよ
 する天よの月の影ありけ
 御水の秋乃比るけしる
 紫のちや草まぬとれて秋む
 ぬの子より人風の夕より
 押合てて軽て又立つるま
 一揃撃つる空のいろ
 枇杷の古きふにふれやうえり

芭蕉九 芭蕉九 凡兆九

来邦兆来邦兆来邦兆来邦兆

史邦九

九北

市中と物の中はひやな月
 あつしくと門く乃あう
 二番草馬のもうた後さび
 灰うらうくううう一牧
 け節を恨も足知をもあふ
 たくしひやうしに最き狼
 草村小蛇こはうううう
 露のさきううにに煙ゆり
 道心のれこりハきれつむ
 道心七尾のきハけうう

北 来 菰 北 来 菰 北 来 菰 北 来 菰 北 来 菰

奥の胃あつる西の老を
 待人のし小は門の落
 立ううう原風を倒さ女子
 陽度ハ竹の筆真子候し
 苗香此安を吹流を夕嵐
 傍やうむく寺ふうう
 うううの橋く世をける秋の月
 年一斗の地さううや
 五六斗はさつり
 名
 足やうううううううう
 退さうう早さうう乃刀
 うううううううううう

北 来 菰 北 来 菰 北 来 菰 北 来 菰 北 来 菰

戸障子もしりあかしの雲を
てんきうすりりいつく
ころくとも草薙と作る月夜に
登とやうなふ起——初秋
そのまうにころひさるる升
ゆききき蓋のあをぬす
草薙はちきくちきくちや
いのちききききききき
さあききききききき
浮世の果は皆小町たり
あにあらはききききき
ききききききききき

北 来 菰 北 来 菰 北 来 菰 北 来 菰

これひに風遠なる花のり
かききききききききき

来 菰

九兆十二 芭蕉十二 去来十二

灰汁桶のやうきききき
あききききききききき
新ききききききききき
ききききききききき
子けきききききききき
ききききききききき
ききききききききき
ききききききききき
ききききききききき
ききききききききき

九兆 芭蕉 去来 北 来 菰 北 来 菰 北 来 菰 北 来 菰

中より一にうすすこ略六風堂
 蛭のたまをうすこ略六風堂
 そのつりひりききききききき
 近きききききききききき
 金澤とくふふふふふふふふ
 あつ風堂すきききききき
 町内の子秋もあつ明やき
 何をえるあつあつあつあつ
 花きききききききききき
 本よりあつあつあつあつあつ
 のへるやう少陰供よりあつ
 業よりあつあつあつあつあつ

北 蕨 来 水 北 蕨 来 水 北 蕨 来 水 北 蕨 来 水

水よりあつあつあつあつあつ
 藤の結きききききききき
 すきききききききききき
 何つりひりきききききき
 夕月あつあつあつあつあつ
 人もりきききききききき
 うきききききききききき
 又もたきききききききき
 堤より田のきききききき
 かきききききききききき
 揚子江尻あつあつあつあつ
 雨のききききききききき

北 蕨 来 水 北 蕨 来 水 北 蕨 来 水 北 蕨 来 水

直祿あるを望むたはれ
 ちうく水は蒲花うきえ
 系極後つるふ咲よりり
 まる三月曙のそと
 野水

九兆九
玄來九
芭蕉九
野水九

餞乙卯東武行

梅のあつ菜まうりこれ者のさうけ
やとあつさささの雲
雲の葉あつ小葉おおひあわや
さつさつさつ下されり

蕉 乙 珣 素

二階の窓をくぐれしるあり
 紋やうつしは海をええむ
 指の糸延乃力むとさうや
 ろつしんは卯かきゆ。鈴鹿山
 川を頭くしと呼ぶるべしれ
 卯の刻乃箕もまゑぬ小舟方
 すくきむ松乃志りのありり
 萩のれすしされれよりとて
 春うさよる百千雪の一更又
 懐ふもをあるむる秋の月
 夕ささきまぬあかぬつら

品 凡 智 品 男 不 品 燕 碩 男 燕 品

水牙北慈

残の柄はまきすくくくくくくくく
 手車のもちくくくくくくくくく
 名まじりくくくくくくくくく
 店屋物くくくくくくくくく
 汗ぬくくくくくくくくく
 くくくくくくくくくくく
 大膽くくくくくくくくく
 身いぬれ紙のくくくくく
 小刀の 蛤 又くくくくく
 棚くくくくくくくくく
 くくくくくくくくくくく
 くくくくくくくくくくく

玄来 北 正秀 来 才残 土芳 残 芳残 園爪 猿雛 残

雨交もくくくくくくく
 夢曲線くくくくくくく
 嘆くくくくくくくくく
 海へハくくくくくくく
 形くくくくくくくくく
 くくくくくくくくくく
 くくくくくくくくくく
 雛の徒と海くくくくく

爪 雛 芳 爪 氣兼 史邦 地水 羽紅

芭蕉三 乙卯五 土芳三
 孫碩三 園風三 素男三
 猿雛二 智月一 嵐景一
 凡北二 史邦一 玄来二

とある人として願を乞ひてとあると傳て
幻燈菴の二堂寂滅して静しく草菴の宛を祈ぬ
まへて山岳といひ静寂と云ふる器と云ふべくも
あらずあるれ橋を越れば菴外林乃上の松の
影より日を輝くことありて人の心を驚かす
あるの菴里の木のこけ入るていのまの松の
ありて菴の豆畑ふりてありて菴のまの菴
日影の山乃松ふりてある菴中静寂は月を待てい
影を付ひ畑をたぐへて國雨は菴をたぐへて
いそいでひりてある菴をたぐへて山野の松をたぐ
え菴をたぐへて菴中人は倦てをたぐへて
いそいでひりて菴中人は倦てをたぐへて
いそいでひりて菴中人は倦てをたぐへて

ありてある菴中人は倦てをたぐへて
いそいでひりて菴中人は倦てをたぐへて
いそいでひりて菴中人は倦てをたぐへて
いそいでひりて菴中人は倦てをたぐへて
いそいでひりて菴中人は倦てをたぐへて
いそいでひりて菴中人は倦てをたぐへて
いそいでひりて菴中人は倦てをたぐへて
いそいでひりて菴中人は倦てをたぐへて
いそいでひりて菴中人は倦てをたぐへて
いそいでひりて菴中人は倦てをたぐへて

題芭蕉菴國分山幻住菴記後

何世金隠士以心強高賢也何處無山
川風景因人義也同續芭蕉菴幻住菴

記乃識其賢且知山川得其人而益我
矣可謂之與山川共相得焉廻作鄙章

一篇歌之曰

望湖南兮國分嶺

古松鬱兮綠陰清

茅屋竹榻幾數間

內有佳人獨養生

滿口錦繡輝山川

風景依稀入繡幃

此地自古富勝覽

今日因君尚益蒙

元祿庚午仲秋日

震軒具州

凡右日記

時多春中又てやる林無うれ

曲水

ふりさるるの影さうふりさるるの影

曲水

湖山に五ふふふふふふふふふふ

玄米

軒ちふふふふふふふふふふふふ

凡兆

細腰のやふふふふふふふふふふ

千那

傍帝性

杯碩

柳ふふふふふふふふふふふふ

丹使

いふふふふふふふふふふふふ

里東

掌ふふふふふふふふふふふふ

乙丑

ふふふふふふふふふふふふ

怒誰

ふふふふふふふふふふふふ

標志

ふふふふふふふふふふふふ

元志

ふふふふふふふふふふふふ

汎士

空あつてけすしや月れ夕

史邦

月けや海を尻用ふ夕すこ

天
雲

まつくさハ雲れ多まつむ津水

天
柳陰

津しきやとんぬるむ花この

如行

傍又ツぬるあり

夜

花乃木をこくくて時や時のお

井水

目の下やもはくはく海原し

市境

又まゝをらん

半強

從ふ鳥や早苗はくく夕海

妻の髪をくく夕海

之道

一宮のれやもく相田のくく妻

事音

一夏の山さうりや旅のくく

音町

夕まや梅木の奥のくく

及看

罪様腰掛

舟風や甲うされくく

音

路女嘉

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

小枝

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

木節

色つれくく

花よりん葉代をくく

花

縮の花これと佛の玉をく

音月

石のやいりくく果やくく

初紅

梅の枝やこれと時をくく

音

彈寺ふ一日あきふ砂乃上
 板の角乃くくぬ契
 穴
 溪出ーの牛に債とるや
 方れぬ姫うさくく口
 内付ふ債とる穴のうさく
 籬乃氣乃名ふさぬ
 きてるさく契もむ契
 付信さくさくさく
 削さうにさく板乃さく風
 さぬさくさくさくさく
 引さくさくさくさくさく
 さくさくさくさくさく

花といふや 影いぬまのやうにて
水かゝのたふかたうよつゝ

雀カの字や扱あて候うる等の聲
てゝるふの岸の扱ありしき
立た家やと考かへしゆれハ秋あき
ぬけしきとをのぞく耳みみ酒
やあきとせき合あひふき又また人
慈あはれをきいてふの洗あらは
悔くしきとふの二歩ふたふみの足あしを
洗あらはさんてよとふりよと

沽園 里 沽 里 沽 里 沽園

よきことあるを安んずるに
あつたうあつたうと云ふ乃客
何れもあつたうと云ふ馬途
風ふ多々やま子宿の穂の月
産所秋の信布は行くへて
うた歌乃むとて女房呼り
明とつて停務の年海の年歌
著とあつたうこれと云ふ一休
信布もあつたうと云ふ花奴
来歸ある竿乃條纏
常乃なるハ草と持残し
と云ふ合とて成て所

手くし居られ老と才無く
 三時影實のた乃とさむや
 けの寢ふこす。花子のち藝で
 あつゝむ麦をうり刈てとふ
 口々に寺の技圖をお世へ
 屋のおまのあつハ侍へき
 錢うりくすこつとぬ小高
 卑下へて居よん料理ふ
 肌入へ秋ふちへりり香月丹
 都ふこあつとむ。毎のさ
 けをさ實の母おあつ聞く
 ち付てりち相の庄内

虫のまはく帷子時のあゝ
 空と新緑よき杉苗の風
 花れうけ葉を三軒子の
 あゝ田の土乃かゝるうら

里沽莧里

里函

我欲為之

沽
南

多々あるに對し、

芭蕉

大木の
上へも
秋

馬寬

町切小月又のたの集り
通るる次

里佑

高き所の習うれは格うて
はうれは格うて

汪 葵

姐の雛衣をうけ取り

里

月利て家々々々々々

芝

すゝ
ちり
あき
わ
ぬ
の
お

里

草の香あふくやしの糸を流さる

頁

修約集編より

16

五等族之形一ツ社を以て

三

有
三
三
三



室舟の蓋の中央より左右に
柳の條へ門をまきり

站里

百勝よりりて其るも軍さふ
 こきりて孫よりりて其るも軍さふ
 清池乃 清池乃 清池乃
 一のあひささそふもせぬ
 砂を這ふ棘の中へ縁線
 別と入るひみせられ
 火煙の火のけりて孫を其るも
 石の如く 石の如く 石の如く
 折れし実月の如く天を
 仰り加減の如く天を
 月影の如く天を
 月影の如く天を

里 沾 芝 里 沾 芝 里 沾 芝 里 沾 芝

月影の如く天を
 月影の如く天を
 月影の如く天を
 月影の如く天を
 月影の如く天を
 月影の如く天を
 月影の如く天を
 月影の如く天を

里 沾 芝 里 沾 芝 里 沾 芝 里 沾 芝 里 沾 芝

猿蓑よりりて其るも軍さふ
 月影の如く天を
 水影の如く天を
 水影の如く天を
 水影の如く天を
 水影の如く天を
 水影の如く天を
 水影の如く天を

里 沾 芝 里 沾 芝 里 沾 芝 里 沾 芝 里 沾 芝

定よりぬ娘乃心取てつて
 麻戸のてり多とて歌よ愛
 子孫を以てておらんわ
 大工つてひ乃事よ夢ゆ
 米糲もりやういそ
 くる牙て市の中と押あ
 けあてり強きたのけも
 鴨の池のすてぬけぬ

今宵賦

野盤子
支考

今更之六月廿二日のちふふひのちふふの

[illegible]

おれりてまをきくは照
持佛のうやふくは
平畦と菜と蕎麦一たて
秋風りる門乃乗風
馬引く娘は秋の月乃
尾張てつき一あふあ
縁好乃く一の夜あふ
心月るの機もくさ
さる風は蕎麦店のはり
藪る村へぬける道
食ふぬめは買ふも

其考然も堅菜も然考其

何その時々山伏なり
無所を指す所なき
蕨こはる五月抄末
おきくは生るる所
隙乃月あは雲の氣
春くくもをぬ酒の
さかえのををあつ
針付く文筆生る月
そくくあうく血乃
所發つる血条の角
る隙をあくる表一
今乃乃ふ絶をるる

其考然も堅菜も然考其

田中

菖蒲乃石地中くちや海様
咲けりるさや飯菜六十石
山門は花をのく——まの地
ちうけ木の根やあつて花の
花のまとはさく飯食人々
いれやうんまを食をいれま
めりまにひきのまうや新の
一日を花のえのあつてや
八字様とあつて花のまをい

若菜

菖蒲乃石地中くちや海様

本里 桃首 一桐 如雲 其首 華 卓食 沾圃 全 虎宅

菖蒲乃石地中くちや海様
咲けりるさや飯菜六十石
山門は花をのく——まの地
ちうけ木の根やあつて花の
花のまとはさく飯食人々
いれやうんまを食をいれま
めりまにひきのまうや新の
一日を花のえのあつてや
八字様とあつて花のまをい

梅 附打

菖蒲乃石地中くちや海様
咲けりるさや飯菜六十石
山門は花をのく——まの地
ちうけ木の根やあつて花の
花のまとはさく飯食人々
いれやうんまを食をいれま
めりまにひきのまうや新の
一日を花のえのあつてや
八字様とあつて花のまをい

曲琴 孤屋 尾頭 芭蕉 井水 甚用 冒名 良品 万手 奥日

あゝ梅やうゝまふあふふら
ら寝るや梅のあふひとあてあふ人

千川
大丹

天神のやうふ流る

あふはけとあふや梅のあふきふ

慶系

あふはけとあふや梅のあふきふ

千那

あふはけとあふや梅のあふきふ

元元

あふはけとあふや梅のあふきふ

李由

あふはけとあふや梅のあふきふ

九葉

あふはけとあふや梅のあふきふ

巴土

あふはけとあふや梅のあふきふ

史邦

あふはけとあふや梅のあふきふ

其角

あふはけとあふや梅のあふきふ

史邦

あふはけとあふや梅のあふきふ

史邦

あふはけとあふや梅のあふきふ

史邦

あふはけとあふや梅のあふきふ

史邦

あふはけとあふや梅のあふきふ

史邦

あふはけとあふや梅のあふきふ

史邦

あふはけとあふや梅のあふきふ

史邦

あふはけとあふや梅のあふきふ

史邦

あふはけとあふや梅のあふきふ

史邦

あふはけとあふや梅のあふきふ

史邦

あふはけとあふや梅のあふきふ

史邦

あふはけとあふや梅のあふきふ

史邦

鮎乃子此春すき候し源のまゐ

わげうやとたふらうてく小鮎の

あゝ魚のあゝまうや汐あゝ

白魚のあゝあゝあゝあゝ

源川にあゝあゝ

あゝ魚をうゝあゝあゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

土芳

圃水

子珊

山峰

き角

正秀

此筋

羽紅

猿雄

園指

車

荒雀

馬寛

拙健

乃龍

正秀

夕可

一桐

圃沼

猫虫 附胡蝶

蕭公英やあゝあゝあゝあゝ

日乃彩子猫の抱あゝ狂活あゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

うゝあゝあゝあゝあゝあゝ

様丸

支考

何のいふのうに里をける母橋か
已百

白日をり也

やうりてと翅を動かす胡蝶は
柳梅

衣文意のうらやまをたのむの如
惟然

晴の舞あつる花よりうらやま
園花

風吹く花の出来たる小蝶は
雪忘

春鹿
雪忘

春鹿

振やうりてのて度丹々舞の角
沢維

春鹿

妙禪のきくはあてまさうな麻
木茂

苗れやまを隠すまは月夜
い筋

千川乃田をわつた人
一巻

桃附椿

白桃やま川くも花はあめ
桃隣

今と花とまじりて花をり花のうら
分我

依りてやま花の上の花のうら
雪芝

梅さのうら中をまはる花のうら
水鏡

花さる花やま花のうら
其角

に東乃ま曲々花のうら
其角

おのく花のうら
其角

小服紗より花を平せむ
角上

花を花より花のうら
残香

花あけくも花のうら
旧木

ちり子様あつてもるに續てる

款
附
鄒
昭
卷

山吹也 恒六子孫 著

田家の人を對して

山吹も散るよ紫け舞ふ千代
堀おこははくしの林や蟻のよみ
藪野や袖の更なやうく暮る花

五月

山乃端をりく魚なりと云はれ

附集雲蛙

此よりきつきのふたりやま乃雨
あまのつ子合ひかま乃

長雨や唐丸あつて暮ととろろ

たふうー　るるう　武にの　旅を　とる　るる　るる

草木花之何如之

とるやきうとうふ班登挺

此法くや性乃居る云乃直

沙丁

乃初見帆乃渡路多故汝亦
見川又富士山新乳亦沙丁魚

新志

出かりやあられ飢ふま加増
名料やうゑに越ゑる桐乃苗

園指

細堂

臨秋

荆口

長壽
魯町

荆口

乃我

游
刀

支考

桃音

望

風腦

玄米

園指

許六

風腦

思ふに乃松のそとちやあゝ
くけろふや巖は腰乃掛ちめ
小石を花をさふめくつれや無縁多
夢を夢う獨居や母をやちの中
あはせきくひ容やつれやめけふ
まふりやいふおれち中れ小室
三尺乃鯉をめめえいふと他
引をれ中よあま田畑と
之内を

土芳
配力
万手
苔蘚
増水
平秀
仙化
支店
支考

事止

延通ハハのくすれを所ハ

山年
武仙

延通ハハのくすれを所ハ
夢や報をさるるの里に
夢を夢のくすれを所ハ
あま乃報をさるるの里に

百華
尚白
園落
山峰

はふりやあま乃報をさるるの里に

元りやあま乃報をさるるの里に

千川

人もくぬまをさるるの里に

甘蕉

あま乃報をさるるの里に

甚角

標の空にわたりやあま乃報をさるるの里に

氷雪

あま乃報をさるるの里に

去来

あま乃報をさるるの里に

女芳

くくまやよくけくくる空洞法

あま年孫をすけく

元日やちし片ちり此事乃死

子其あまや川熱風や死ひき

脊ききく切ふ指をえんやあま

齒牙乃あまえん包底此鯛乃

鯉乃貧のききんをけく初日

く川まきや年と若狭の白は金

枇杷乃あま乃移れく神あ

世乃紫や紫をあまの若夷

湯りりや大あまけの初日教

えりやあまのあま指乃不器

風騰

猿雖

葛草

世き

耕雪

九柳

前川

斜嶺

山峰

任行

先赤

估園

蘭角

夏之部

郭公

曉乃電とささやあまきん

法とあまきんやあまのきん

あまきんやあまのきん

蜀魄啼ぬあま朝然山

吟然のあまやあまのきん

其角

支那

多良

支考

如雪

若中

淡よりも露田はあけりし子奴

はるをふゆのは露もて順秋の吟しと通るや

郭公のふのあけや中やより

沾圃

木附草花

橙や目にこあれりる友あま

関指

里ののぼりりぬえあま

世扶

園中 二首

け中乃ちあまといつれ折乃花

此端

手切めやあまや柿のそふふ

千川

那百合や上よりさあけ鉢の系

素我

題山家と百合

ちやあまのそふふとあまの百合

素考

山りるのうれそあまや杜若

尾頭

冷汁とあまのそふふと杜若

沾圃

手のよくあまのそふふと杜若

イ助義

友のそふふとあまのそふふと杜若

独候

あまのそふふとあまのそふふ

沾圃

夕のそふふとあまのそふふと杜若

芭蕉

夕のそふふとあまのそふふと杜若

七人 嵐

蘭乃のそふふとあまのそふふと杜若

砂香

蓮のそふふとあまのそふふと杜若

け節

客あまのそふふとあまのそふふと杜若

白雪

客あまのそふふとあまのそふふと杜若

言取

瓜

新雪ふりて涼し瓜の土
那由とや種は入るもさうらん

芭蕉 至曉

あゝん

森ある。信をいさね牡丹外

凡弦

早苗

系入や多相乃田植乃陽の中

七考

卯七

早乙女は結んてやんまの奴

園指

如くも月の桂おくれも早苗外

魚日

田植身よりなる親の御心世し

字乃

一田よりあつてやあ乃者

少枝

里の子の燕握るも苗のうね

支考

螢

螢を火の烟ふとてあつる外

許六

之日月にま乃螢を鳴より

飛萩

納涼

涼しや竹揺りけ花つる系

半残

花菓や度々あむる夕涼

惟然

涼川の菫は春より

いせ成る系や風あふらけ涼

史邦

涼しやや草を曳くの繩をこ

予愛

る婦や裏門明く夕涼

牡年

涼しや牛け尾振て川の中

万手

漫真 三句

腰くくの中へ添き添子り那

酒堂

添くくも極くくをぬくくける

支考

生し綿を繰らるる添くく添くく

也甚

不世以翁と書るまのま

添風も出るくく添のこりれ外

游刀

以くくきき字をぬける添くく那

全

えりく人よき添くく添くく那

去来

黙然ふくする添や石乃上

匠秀

職人乃惟子くく添くく添くく

土芳

添くく添くく添くく添くく添くく

山昌

添くく添くく添くく添くく添くく

里圃

豊々

かきくも添くく添くく添くく添くく

典校

添くく添くく添くく添くく添くく

万字

添くく添くく添くく添くく添くく

添くく添くく添くく添くく添くく

正秀

添くく添くく添くく添くく添くく

乙羽

添くく添くく添くく添くく添くく

素焼

添くく添くく添くく添くく添くく

素焼

添くく添くく添くく添くく添くく

素焼

添くく添くく添くく添くく添くく

素焼

添くく添くく添くく添くく添くく

素焼

添くく添くく添くく添くく添くく

素焼

弁乃子

筍はぬきく 岩乃 崩る所

可誠 曲張

五月雨 附々々

あつ 雪やまきくもなしく 霰雨の中

不玉

さくこれや 雪崩ふ 素乃 烟

芭蕉

五月雨や 踵ふこれぬ 残つて

沿圃

夕まふさく 合りり 日傘

松候

白雨や 蓮乃 夢あつく 池乃 葉

苔蘇

夕まふさく けり 竹の 枝

晚鳥

ゆふさく 傘 くる 家 一町

圃水

蟬

白雨や 蟬 鳴りて 蟬乃 聲

正秀

まづ 蟬 鳴りて 蟬乃 聲

胡故

蟬乃 聲 蟬乃 聲

乙別

蟬乃 聲 蟬乃 聲

晚鳥

蟬乃 聲 蟬乃 聲

兼拾

離々

蟬乃 聲 蟬乃 聲

杉風

蟬乃 聲 蟬乃 聲

荆口

川 結ふいて

如真

志 焼や 夢 竹 籠

文鳥

吳越にみくらくやや園の空鬱
夕園をわくもきつや酒をや
其
既

魚阿ゆる草も阿れ流るる
三光

樹々もや流るるむく日乃面
重要

沢渾や道付くゆる雨のあと
母を

蝸牛 けの川を乃るる
水臨

晋乃測明をうそむ

窓形もさるる乃るる
いそ成

牀このか 惟子かあるる
惟然

金銀のくさくさ乃るる
あやぐさくさあやぐさの納除ハ

扇のやうに世をさるる

惟子乃るるひとやなり
綾百
支考

秋之部

名月

名月ハ蟬の音や田乃くり
イそ成

名月のまじりゆく
棉留

こころハ修好の中
名月乃るる

とかりや
とれく思ふる秋のん

一にけらや
とれく思ふる秋のん

とれく思ふる秋のん
とれく思ふる秋のん

園庭や
とれく思ふる秋のん

あふりねと平田側くと思ふりさうと光杜
吟雲あのをやうと云ふさうあるふと
その次乃棉をさけらるる葉をすてむと
やうなりなり今乃このむ所乃二節はあ
月乃このまきなるひりおるなり
斗にとありやうと云ふ花は清香あり月
にほあうて是も詩奇のうと云ふれは
前ハ寂寞と云ふと云ふは風無と云ふ
そと云ふ吾と云ふと云ふはと云ふと云ふ
なと云ふと云ふ乃今云ふと云ふ

支考計

名月乃海より冷る田蕪の那

西堂

明月やあまの月ハ般屋の月
その乃乃根と云ふ月見
あまの月ハあまの月見と云ふ
名月やあまの月見と云ふ
明月や文科よりめやうと云ふ
明と云ふ吹ける後と云ふ
中切乃葉は氣のつく月と云ふ
名月やあまの月見と云ふ
明と云ふ遠くの月見と云ふ
松の月見と云ふ
月内やあまの月見と云ふ
名と云ふや四人衆一船の那

如行

露沾

智月

園指

涼雲

不玉

死刀

尤柳

圃系

山峰

凡風

麗雲

老の身とて月乃月也内てむ
明内よかられ 早れいれ
泥井

い勢乃山田ふありておのの居とまひ

三つる時

二足すてさる能もあぬる月見
芥子梅と畑とて仍人月見
柳の名れふ即とて月見
山多れりつとて梅ぬや山幸の月
名月や里乃ふふひ乃まき子案
陽に居る内見たりや慈機
月月やあふのしきき女中
明とや何れひろりれぬの道
支考
空牙
如真
宗比
木枝
利合
丹瓶
野萩

形入乃客ふふとる内ミヤ 正秀

渡川のわたりとて月とて

舟引乃るわたりとて月見外 天来

伝言乃月ふ糸 或定歌柳 系机

あふ三老幸とるふありて又お盛

柳とてはくはりしとてあふ

破指を園小のあふやうの月 估圃

あふふふとる月入あふや堀のやの 馬見

あふふとる月あふとるぬ指外 里東

内新や海乃さるさる長廊下 牧幸

深川の未ふとてわたりとてあふ

川上とてこの川とてや内乃友 芭蕉

十六歳をわつうに園乃知ル
みさよひハ園のふりなりとてその日

全
棟

七

文江や新田の上のあはれの海

惟然

吳人金日盛之說

京

船形りの雲志くやりの糸

東坡

五、あつちをいふは、外をいふ。

佑園

新風也薰娘乃固也

乙列

主秋

粟ぬきや各ノ片家ノ秋

鹿川

秋の山や中又次之雲升華

九次

種草

於露可差透通以格致外

柳樹

和之七
ぬ格致のうみ

陽友

女帝花物語馬骨の染付

謂子

[illegible]

三

必歌を以て冊子にして
冊子

鳥栗

う圓　　を以てけや黄をいふ

支源

芭蕉庵

向合八色美蓉玉錦，余外

美

のよ姫のちきりきり

邦

の所をききおろしやうん

乎

新編 萬葉集 卷之八

志

卷之三

曉

秋う勢や二番だこの神さや
 雀子乃 秋も 思ふや 秋の風
 はあうと かきううー け 秋乃風
 松乃葉や 思ふよ 思ふ 秋の葉
 とのつう 草乃 思ふよ 思ふ 秋
 如んうや 思ふよ 思ふ 秋
 あれして 思ふよ 思ふ 秋

稲妻

海刀 式之 支考 風四 圃燕 九良 猿 東 北 十芳 芭蕉

本實 附 園

園栗乃 思ふよ 思ふ 秋
 炭焼に 思ふよ 思ふ 秋
 秋乃 思ふよ 思ふ 秋
 思ふよ 思ふよ 思ふ 秋
 思ふよ 思ふよ 思ふ 秋

去虎 圃堂 毛栗 占圃

思ふよ 思ふよ 思ふ 秋
 思ふよ 思ふよ 思ふ 秋
 思ふよ 思ふよ 思ふ 秋

惟然

思ふよ 思ふよ 思ふ 秋
 思ふよ 思ふよ 思ふ 秋
 思ふよ 思ふよ 思ふ 秋

芭蕉

桐

後庭乃 塙はまれう村に系

小鯉

麻

尻よりわね花明の麻や風の香

風腫

麻かつらと麻切とらん時を分

一酌

曲業

起しをへと送りり草まの花

車庸

はれ上は裡やむう人種を分

賞山

さはけりる乃もあやう時を分

如聖

い芳乃 斗徒は山家とてりて

草をまはさうふてりてりてりて

芭蕉

早稲刈て落つふくや小百姓

乃於

山雀のやさやに啼きあ乃 稲

斗徒

一室のつそや草乃とんと刈

友考

肌をそふ始はあう草をまのき

推然

百ちりていううと種をまか

木言

大師の系はあまのて様かあま

種はまのて

そのけりや西瓜上戸の花乃 種

治園

菊

公頼早 二百十日も恙か

葛衣

あやうとやうと白菊乃玉牡丹

酒子

煮る本綿乃とれにまき一菊乃花

支考

歌后房

可きくもやわゆる山越乃の事
傳ふる一席の情やう乃系

几峯
夫草

暮春秋

度日や青負うて過る秋乃事
以秋と鼓う乃系の恨こりね
以秋やふとひろける栗のふ

冊お

乙刈

出題

雜秋

あふ十海をほおやて殿一ツ
要りてれや家ゆき里松乃中
あふもれもふ近づく取をみ
結る也や忘れぬ秋の雨

之乃

圃友

畦止

口友

ハリ二十九

是ゆゆのよあれこあて靴つれ

萩子

多るやや編とく家乃あふ
松乃あふに渡ると盛るん落ふ音

萬平
素門
素皮

今も馬う宅は散りしもの笛鼓
とく柄へく徒らるるまを雪と舞其

のをよけりうもとんけもあふハ

あれやとハこのあそこの珠あふ

かの鶺鴒を松として修はるる

さうさうも只このせうさう

さうさう

稲つゆやう不乃やう

乃乃種

イロ成

方々

附録

附録

この以乃極乃結具や、
去れども又松風乃とて、
一時もまて、
和、
平、
室、
穴、
ある

妙坡
少枝
世
露
引
妙
園
室
有
口

三十一

石小、
柳、
そ、
は、
日、
仲、
い、
飛、
え、
菊、
き、
竹

里
川
園

占

親

考

やうな菊花のしつゝ時刻を待つ
ふふちゝ思ふふふちゝを展き
のぬきゝちゝさゝちゝあゝの
秋菊と云ふて人々をすゝめ
りゝちゝあゝちゝぬ

芭蕉

美の香や 庭は切なる履入底

其

抽乃色を起ありしもの葉のあ

挑隣

氣乃金味也。土境也。故乃申。

估圖

ハコノ雨や河川に集むる

卷之四

魚子に魚の骨乃枝

三

魚一毫 圖 芝を以て

此書乃陳士可強乃及之教也

（子三ノ）

此乃集也稱乃大者之乎をむき

より造化もろろ及ろろ今又

21. 1845. 2. 20. 1845. 2. 20. 1845.

上も家も菊のて琴のり

人見竹園美

妻親今く尋ねしより是を夕

中先と終りてあるは

少くも睡きあふて風をきく

月夜

うゝせぬ琴や似しぬ蕭井友

泰望

草 附木

水色如綠塢系新日北透

曲

なみは清く咲きやまをわきの水仙花
水仙乃花のこころれや数層き
惟然

范蠡と趙南の古語にや

山家集乃題又やう

一、花もこやさぬ菊乃求う花
え成
車席

山家花をえう用くゆり花
土勢

多花乃ゆりゆりやを花
土勢

山家花も落てやま花
土勢

山家集 附五粘風
土勢

ゆりゆり——木乃まうる花
作徒

早うてゆの射ちむ花
落俗

ゆりゆりや木の花まうる花
惟然

107
三三

山家集乃題又やう
和風

ゆりゆりや木の花まうる花
一七道

山家集乃題又やう
和風

ゆりゆりや木の花まうる花
和風

山家集乃題又やう
和風

ゆりゆりや木の花まうる花
和風

山家集乃題又やう
和風

ゆりゆりや木の花まうる花
和風

山家集乃題又やう
和風

ゆりゆりや木の花まうる花
和風

山家集乃題又やう
和風

ゆりゆりや木の花まうる花
和風

夷漢

多ひす漢 破愛子袴とせり
多ひす漢 鷗も鴨も城より

芭蕉 利合

鳥 附いせ

乃せ乃海をこく

塵埃ふくみぬ月を浦邊

白空

退くけしき色より人千を

萬葉

小春のちと庚申すなり

文章

入海や磯の金又帰る

閑話

驚くけしき色より鴨の足

芭蕉

くつろぎを大退くくつろぎ

衣木

汲汲はこころを入る生海風

利直

〇ノ三十二

うつくしき海内は文をなす

車庸

くつろぎを大退くくつろぎ

衣水

くつろぎを大退くくつろぎ

杉風

くつろぎを大退くくつろぎ

拙候

杜史魚を海脈の大退くくつろぎ

我乃其のくつろぎ

冬月 附食

喰との也門よりあくを乃月

里圃

あく猫乃のけけけけけの月

文章

あくくも森へくくく紙を

小春

あくや門をゆれくく乃月

支考

埋火

埋火や礫やを客の影あり
佳しきとて木を焼くや
自由とや肉と追ひて木を焼く

芭蕉
相先
洞木

二言

初まや門は橋あり夕アを
初まや門は橋あり夕アを
雪あつた心乃うとて水と
鰯魚を焼くやとて水と
雪あつた心乃うとて水と
鰯魚を焼くやとて水と
雪あつた心乃うとて水と
鰯魚を焼くやとて水と

其角
全
夕葉
祐甫
葛原
支考
圃吟

〇ソニナニ

あつた乃うとて水と
鰯魚を焼くやとて水と
雪あつた心乃うとて水と
鰯魚を焼くやとて水と

太原
陽和
肥刀

神楽

あつた乃うとて水と
鰯魚を焼くやとて水と
雪あつた心乃うとて水と
鰯魚を焼くやとて水と

史邦

神楽

あつた乃うとて水と
鰯魚を焼くやとて水と
雪あつた心乃うとて水と
鰯魚を焼くやとて水と
雪あつた心乃うとて水と
鰯魚を焼くやとて水と
雪あつた心乃うとて水と
鰯魚を焼くやとて水と

浄栄
馬光
許六
佑圃

煤掃 附焼つよ

砂香

煤はさきやあゝ何れもさきよ底
才を隣乃かや煤又森
燐をさやわめれど也。油扣
煤抄やお煮一枚踏くといふ
候つとや火をいふなり思ふや
隙けをやあらうといふ語のこ
りち橋のまはれいさな山木
案
て採掘し及も隙地のすのこ
門砂やすとてある所の流石
賣石やといひても近年の暮
後にもふの存つるものやとの言

黄連
三芝
園如
惟我
冷水
嵐峯
圓佛
雪良
里東
草七
車来

〇ソ三十五

橫鉤

荻子

正未乃

生之

李

萬

けり。其圖、別名、虎、う、咽、く、居、よう、を、た
の、あ、り、と、く、修、勢、あ、り、す、と、く、修、り
々、れ、ハ、そ、の、の、の、言、う、る、ま、ま、に
終、り、と、考、え、ち、お、人、を、な、さ、し、

益人よあまのやとあまのやの年あまのや
 余あまのやとあまのやの年あまのや
 術に属所やあまのやの年あまのや
 昔季のやとあまのやの年あまのや
 昔季のやとあまのやの年あまのや
 裁層のやとあまのやの年あまのや
 一ちのやとあまのやの年あまのや

尚白
 桃屋
 山峰
 利合

雑

小屏のやとあまのやの年あまのや
 極作のやとあまのやの年あまのや
 井のやとあまのやの年あまのや
 寺のやとあまのやの年あまのや

針泉
 土芳
 李下
 仙杖

〇ソ

大燧のやとあまのやの年あまのや
 山陰のやとあまのやの年あまのや
 姐極のやとあまのやの年あまのや
 菊刈のやとあまのやの年あまのや
 親教のやとあまのやの年あまのや

圃仙
 雪曼
 工谷
 泊圃
 松風

涅槃

涅槃のやとあまのやの年あまのや
 山寺のやとあまのやの年あまのや
 貧福のやとあまのやの年あまのや

泊圃
 芭蕉
 不撤
 山峰

灌佛

催仏やほくしあふみそふのぬ
あふや佛うされて二三日
催佛や釈迦く授受の徒用
之乃

裏参

喰物もいふふささく泥すり
森るものわくやさき魂あふ
戸内伏や坊主をやふあふり
占圖

甲戌の辰ち條はゆきとあふの
いふてふふふふふふふふふ
いふてふふふふふふふふふ

家々くふ杖はさく發の裏系
芭蕉

悼少年 三

〇ソ 年七

うふふふふふふふふふふふ
うふふふふふふふふふふふ
うふふふふふふふふふふふ
惟然
支考

首のふふふふふふふふふふ
うふふふふふふふふふふふ
支梁

流彩溝

袖も柳もあふふふふふふふ
占圖

臍八

腸とささくふふふふふふ
何のあれかのあれく大降降
如行

難歌

俗東のふふふふふふふふふ

同様の付

涼しくも神の山は見えつるを佛ハ
 みるゝみゝとて二木さうくけり光
 々々細きちりきりすうて佛の心
 とのふふ川越四や富まうて
 ぐさうに於ける涼くを金佛
 會堂は雀啼きりターター
 旅々部

支考
 世坡
 守聖
 乙州
 玄来

送別

元禄七年の夏に松尾の別をさして
 愛ぬらん旅屋のしせの別る那
 別るや柳屋より坂の上
 惟然

荷子

〇リ三ハ

旅人のさうさうも似る推乃る花
 留別
 芭蕉

洛の惟然を宛よりとるよる付

嵐のさうさうの芋とこりて光
 鮎のさうさうの魚と送る別る那
 芭蕉

甲斐のさうさうの魚と送る別る那

さうさうのさうさうのさうさう

年よりて年よりて年よりて年よりて

旅のさうさうのさうさうのさうさう

みへもわくつわくつわくつわくつ

妙の國はわくわくわくわくわくわく

ろれくもハだりなりし小水花
十国子も小はぬはるぬ秋の風
大島北邊より海を渡るなり

全 許六

くぬ歌

くろくももあやうへぬ盆の旅

全

けくろくもあやうへぬ盆の旅

全

ゆやのまゐらくぬく旅

全

まきまきけく砂海あり

全

圓國の心さうも海く海あり

又老乃の廟ひけく秋旅

全

我藩國のくぬ旅のくぬ

全

常陸のくぬあり

全

くぬくもあやうへぬ盆の旅
ありくもあやうへぬ盆の旅
乃のくぬあり

極は藤るけく極は小豆粥

全

くぬくもあやうへぬ盆の旅

全

元禄三年のくぬ盆の旅
武江あり

くぬくもあやうへぬ盆の旅

くぬくもあやうへぬ盆の旅

くぬくもあやうへぬ盆の旅





